
RPG × 学園(仮)

滝川朱也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RPG×学園（仮）

【ノード】

N6865Y

【作者名】

滝川朱也

【あらすじ】

近年、少子高齢化が進む日本。だが次世代を担う子供達はどんな時でも手にはゲームに携帯電話。このままでは日本の未来がダメになる。そう考えた政府の代表は緊急国会を開き、ついに一つの解決策が生まれた。「RPGのような学校をつくっちゃまえ！！！」日本の未来は果たしてどうなるのか…？

プロローグ

近年、少子高齢化が進む日本。

ただでさえ若者の数が激減している中、今時の子供達は、家にいる時も、校内にいる時も、食事中の時すらも、手にはいつもゲームに携帯電話。

家にいても勉強はおろか、外に出かけることも少なくなつた。このままでは日本の未来が危ない。

そう考えた政府の代表達はついに緊急国会を開いた。だがそれから一ヶ月。

今だに解決策は出てこない。

「……」

万策尽きたのか、沈黙に包まれる国会。

そんな中。

パンツ。

突如として入口の扉が開く。

扉の前にはゲームを片手に一人の女性が立っていた。

彼女は国會議員のすべての視線をジヤックした。

少しの沈黙の後。

彼女は言った。

「だつたら作っちゃえよ… R P G のような学校を！…！」

発案者、滝川茜たきかわあかねのその発言から数年後。

他国の協力もあり、ついに東京都内に夢有学園高等部ゆめありが開校。

国内に新旋風を巻き起こした。

夢有学園は今までに存在した教育方針を一新。

学問は午前の部のみ。

午後からは各ギルドと呼ばれる少數グループに分かれ活動する。主な活動内容は、日本各地から依頼されるクエストや、バーチ

ヤルの世界の探検だ。

しかし、どうやらただのクエストやダンジョン攻略ではないらしい。

他にも運動会や学園祭などの年間行事数も豊富。
なかでも夏と冬に各ギルドで競い合う「一大イベント」は滝川朱音
のお墨付き。

もちろんテストも存在する。

開校当時、2・5cmが炎上寸前までいくほどの話題に。
だが教育方針の一新などから、当初は保護者の反対の声もあつた。

しかし、あれから三年が経過した今。

保護者の見方が大きく変化した。

さまざまな掲示板に連なる喜びの文章の数々。

「以前は暗かった子が、笑って話すようになった」

「娘が三年ぶりに会話をしてくれて涙が止まらなかつた」
保護者をも味方につけた夢有学園は年々入学希望者の数を増や
し……。

今年ついに倍率200倍を突破。

有名な大学や企業にも卒業生を大勢送り、今や日本トップの有名
名校へと成長を遂げた。

これはそんな夢有学園へ、半ば強制的に入学させられた不良少年の日常を描いた物語。

出会いは突然に

季節はもうすぐ卒業シーズン。

肌寒い風にも春を感じながら、少年は一人街中を歩いていた。
顔と手には、できたばかりの真新しい痣や傷。

先ほどケンカした時にできたものだ。

(もうすぐ卒業…か)

彼は、通っていた中学にほとんど行っていない。
中学に入つてすぐ、不良と呼ばれるようになった者に、居場所
などあるわけがない。

少なくとも彼自身はそう思っていた。

毎日、朝から晩までケンカしてはまたケンカ。
その繰り返し。

つまらない日々の連續。

少年は歩きながら時計に視線を落とす。
時刻は17時を少し回っていた。

「いつもより早いけど…いいか」

少年の呟く声。

彼はそのままスーパーへと向かう。

(今日は豚肉と卵だつたな)

今日は近くのスーパーの特売日らしい。
(暗くなつたらますます冷えてきたな)

歩きながら空を見上げる少年。

スーパーに着く頃にはすっかり日も沈み、辺りは暗くなつてい
た。

少年は再び時計を確認する。

(やっぱりまだ早いな)

彼はスーパーへは入らず、近くのコンビニへと向かった。
だがその途中。

「やつ……やめてください！」

隣の公園から女の声が聞こえてきた。

「そうゆうの困ります！」

どうやら揉め事らしい。

しかも……。

よく見ると複数の男に対し、女の方は一人だった。

しばらく様子を見ていると。

彼女の嫌がる声が大きくなつた。

それなのに、周りの人間は見て見ぬ振りをする。

そんな周りの連中を少年は一度睨みつける。

(……勝てねえかもな)

相手は体格から見て高校生。

いくらケンカ慣れしていても、正義のヒーローなんかじゃない。

ただの不良である。

それは少年自身一番よく理解していた。

だが……。

「おい……やめる」

少年にとつてそれは、助けない理由にはならなかつた。

彼は、少女の方へ背を向ける。

目の前には3人の相手。

だが一歩も怯んではいなかつた。

「……」

少しの間、沈黙が流れる。

それから数秒後。

真ん中の男が口を開いた。

「なんだテメエ……」

そのまま少年の胸倉を掴む。

「理由はわかんねえけど……三人がかりじゃなきゃ女に話しかけらんねえのか？」

公園に響き渡る少年の声。

それが開始の合図となつた。

……あれから数分後。

少年はふらふらになりながらも歩き出す。
なんとか奴らとのケンカに勝つことができた。
だが……。

彼には勝利の余韻に浸つてゐる余裕はない。
なぜなら……。

「しまつたー！」

スーパーの特売は18時から。

（特売の品が！……）

慌てて時計を確認する少年。

時刻は18時を少し回っていた。

「ヤバい！！！」

彼はすぐに公園を出ようとする。

しかし……。

「まつ…待つてください」

背中から聞こえる声。

振り返ると、そこには先ほどの少女が立つていた。
（なんだ、まだいたのか）

今の少年には、少女に構つてゐる余裕はない。

「わつ…私のファンの方ですか？」

おまけに少女は意味不明な言葉を口にする。

（変なのになに首を突っ込んだよ……）

落胆する少年。

その間も彼女の言葉は続く。

（はあ…しうがねえ）

らちがあかないと思つた少年は彼女に、自分の名前だけを書いた紙を渡す。

「俺…急いでるから」

「えつ…？…ちよ、ちよつと…」

そのまま少年は全力疾走。

もう彼女の声など聞こえてはいなかつた。

「……」

公園に一人残された少女。

ふいに彼女は携帯電話を取り出す

そのまま登録してある番号へ。

ブルルルルルルガチャ。

「あつ……パパ？ 探して欲しい人がいるんだ……」

「うん……そう、名前は……滝川朱也……うん、よろしくね」

ピッ。

「私をシカトするなんていい度胸じやない……覚えてなさいよ、

滝川朱也！――！」

少女、柊エリスは一人笑う……。

氣味の悪い夜風に吹かれながら。

それからしばらくして。

少年改め、滝川朱也は一人帰り道を歩いていた。

案の定……。

朱也は特売の品を手に入れるることはできなかつた。

「はあ……あんまりだ……」

思わず漏れるため息。

自宅に着く頃には20時を回つていた。

靴を脱いでリビングへ。

そのまま椅子に腰を下ろす。

数分後……。

「いててつ……」

ケガの治療も無事終了。

テキトーに晩飯も済ませる。

食器を片付け、自分の部屋へ。

朱也は現在一人暮らし。

幼い頃に両親が海外へと出張。

歳の離れた姉もRPGがどうとかで三年前に失踪。

もともとは四人で暮らしていた家もずいぶんと広くなつた。

ガチャ。

朱也がドアを開けるとそこは暗闇の空間。
部屋の中は殺風景だった。

寝るためだけの部屋。

ベッド以外の家具などほとんどない。

「今日はもう寝よう

自然とあくびができる。

目を擦りながらベッドへ。

「あれっ？」

おかしい……。

ここで朱也はおかしなことに気付く。

不自然に膨れ上がった毛布……。

もう一度言おう。

この家には”朱也しかいない”。

すぐさま近くの金属バットを掴む朱也。

(ヤバいやばいやばい)

彼が驚愕の表情を浮かべたのはいつ以来か……。

朱也は忘れたことはない。

幼い頃に姉に無理矢理見せられた映画……『リグ』。

それは当時6歳だった朱也にトラウマを植え付けるには十分すぎるものだった。

(逃げちゃダメだ…逃げちゃダメだ)

しかし、朱也も男である。

逃げたい気持ちを押し殺す。

そして一步、また一步と朱也は”それ”へと歩み寄る。
バクンッバクンッ。

どんどんと跳ね上がる心拍数。

ついにバットの射程圏内へと入つた。

「スー・ハ・スー・ハ・」

心を落ち着かせる朱也。

卷之三

一切の意味ない無意味

それが頂玉つ二八

それが糸を一かし

床へと落去

卷之三

失せに思ひせりば 一を拂ひ一をす

ガバッ。
毛布が弾け跳んだ。

「つめ～……。」

毛布と一緒に朱也の体を後ろへ吹き飛ぶ

その辺壁に激突。

(死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ)

もはやパーティクに陥っていた。

ヘリコプターの上には人型のシリエット

ヒタシヒタシ。

光は徐々に朱の方へ。

- 1 -

モハヤ先也には立ち止かる力も残していなかつた

そしてついに光が目の前に。

(「Jあなたが」「Jあなたが」「Jあなたが」)

下から上へと上がっていく光。
あまりの恐怖に朱也は田を

開
じ
た

始まりは必然に

朱也は田を覚ますとベッドの上にいた。
ギシイシ。

寝返りをうつだび軋むベッド。

(起きるか……)

「んー！ああ～……」

朱也は背伸びをしながらベッドから下りる。
そのまま歩いてドアへ。

……だが。

「あれ？」

(なんか忘れてるような……)

朱也是不思議な感覚に包まれる。

疑問を感じた朱也是昨日の出来事を思い返す。

(昨日変な女に会つて……ベッドが膨らんで………)

「思い出した！……」

朱也はすぐさま振り返る。

目の前にはベッド。

起きた時には気づかなかつた。

だが今……。

朱也の視線の先には姉の姿があつた。

朱也の実の姉、滝川茜28歳。

三年前に朱也の前から失踪。

そんな彼女が今、朱也の田の前に。

「…………」

朱也是姉の姿を確認するや、転がるバットを無言で拾い上げる。

(俺は……負けない！)

いろいろな思いがあつた。

姉に対する恐怖心や怒りなどだ。

朱也はそんな様々な思いを全部……。

握りしめたバットに込める。

(チャンスは恐らく一度きり)

失敗は許されない。

バットを高々と振りかぶる朱也。

そして……。

渾身の一撃が振り下ろされた。

「死ねえ！！！！！」

バットは物凄いスピードで茜の頭部へ……。

ガツ。

感触は十分。

思いが詰まったバットが茜へと直撃した。

……かのように思われた。

「随分なおはよう&お久しぶりだなあ……朱也

感触は確かに感じていた。
しかし……。

振り下ろされたバットの先にあったのは枕。

そして寝ていたはずの茜は真後ろに立っていたのだ。

「はあ……やっぱダメだつたか」

朱也にはもともと殺す氣も殺せる気もなかつた。
茜のでたらめな強さは朱也が一番よく知つたいた。

「お前不良やつてんだって？」

気付くと茜は再びベッドの上にいた。

その手には携帯ゲーム機『TST』が握られている。

二人が会話をするのは三年ぶりだった。

「アンタには関係ないだろ」

今さらとやかく言われる筋合いはない。

朱也はそう思つていた。

だが……。

「ある

茜ははつきりと告げた。

「アタシはお前の飼い主だ」

「いや俺犬じゃねえし！」

茜の予期せぬ発言に、朱也は思わずツッコみをこなしてしまつ。

「いや猫つて可能性も……」

「ねえよ！……」

「じゃあなんなんだよ！……」

「なんでアンタがキレてんだよ！」

「いやキレイでないっスよ」

「……だあ！……」

ぽかつ。

「猪木か」

「なんでえ！？」

その後も茜のペースが続いた。

「……」

朱也の我慢も限界に近づく。

すると突如、茜の顔が真剣な表情に変わった。

「……前フリは終わりだ」

「いやなげえよ！1時間の前フリがどこにあんだけ！」

「お前卒業したら東京に来い」

「つてシカトかよ！」

朱也のツッコミを見事にスルーした茜。今だ真剣な表情は崩していない。

茜のあまりの真剣さに対応に困る朱也。とりあえず理由を聞いてみると。「すると茜は……。」

「お前を高校へ通わせる」

まさに即答だった。

「はあつ！？」

それは朱也が想像していた域を遥かに越えていた。

朱也は高校に通う気なんて微塵もなかった。
中学に行つてない者の行く場所じゃない。
それが朱也の考えだ。

「いや無理だつて！だつて俺、中学すらまともに行つてねえん
だぜ？」

「かまわない」

必死に反論する朱也。

だが、茜の言葉の強制力を越えた支配力に、上手く反論できず
にいた。

「俺みたいなヤツが高校に入れるわけねえだろ！？」

「入れるから言つてる」

「どこなんだよ？」

「夢有学園だ」

「なつ！？」

夢有学園の名前は、朱也みたいな不良でも一度は聞いたことが
ある。

「超有名校じゃねえか！」

「いや～それほどでも～」

「なんで照れてんだよ！？」

朱也の心は傾きかけていた。

（なんで俺みたいな不良が夢有に……）

しかしそれでも素直に首を縦に振れない朱也。

朱也は昔から人付合いが苦手だった。

（学校に俺みたいな人間の居場所なんてねえんだ）

それが首を縦に振れない一番の理由。

「……」

すると突然茜が黙り込む。
流れる沈黙の中。

（やつと諦めたか……）

朱也是立ち上がる。

「もういいだろ？」

そのまま逃げるよつてリビングから出よつとした。

そんな朱也の背中を見つめる茜。

そしてただ一言。

「逃げんなよ」

今までとは明らかに違う茜の言葉。

その言葉を聞いた朱也は、まるで金縛りにあつたかのように足を止める。

全身に駆け巡る衝撃。

なおも茜の言葉は続く。

「このままよつと…逃げんのか？」

茜の言葉に俯く朱也。

何も言い返すことができなかつた。

再び流れれる沈黙。

「変わりたくなえか？」

その沈黙を破つたのは、また茜であつた。

しかし、その言葉には先ほどと違い、諭すような優しさがあつた。

た。

拳を握りしめる朱也。

その手は震えていた。

「俺…だつて……」

消えてしまいそうなほどの小さい声。

次第にその声は大きさを増し……。

「俺だつて変わりてえよ！…！」

朱也ははつきりと口にした。

嘘偽りのない本当の気持ち。

「よく言った！」

それを聞いた茜の口元は笑つていた。

そこからはもうどんどん拍子で進んでいった。

「あれ？」

（なんか上手く丸め込まれた気が……）

何かもやもやしたものを感じる朱也。

隣には一コ一コ笑う茜の顔。

朱也の視線の先には入学届けがあった。

握られたペンと印鑑。

気付くと手続きがすべて済まされていた。

必要な書類に目を通す茜。

それから数分後。

「よし！」

すべてを確認し終えた瞬間。

茜は不適な笑みを浮かべた。

その表情を朱也は見逃さなかつた。

「いつたい何考えてやがる？」

昔から茜には唯一の欠点がある。

それは……。

「べつ……べつにいい？」

嘘がめちゃくちゃ下手くそなことだった。

ほとんど棒読みに近い台詞。

さらには口笛まで吹きはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6865y/>

RPG×学園(仮)

2011年11月24日19時48分発行